

ある群像

2022年6月号

公益社団法人 好善社

東京都目黒区中町1-7-4

〒153-0065

電話：03-3712-3845

Fax：03-3791-1150

2022年5月25日

発行 三吉信彦

編集 長尾文雄

川崎正明



大島青松園から見る瀬戸内の夕陽 撮影／協林 清(大島青松園)

療養所の夕映え

「つつがなく生きて今日すてきな夕映えを見て／終わりのときはあのようにありたいと／ひたすらに希う／私です」。大島青松園に在住した詩人・塔和子さんの「夕映え」という詩(部分)。二〇一三年に八三歳で亡くなられた。その年五月の大島青松園の入所者数は八二人だったが、九年後の今年一月はちょうど半数の四一人になっている。

全国のハンセン病療養所の入所者数が九五〇人余に減少、平均年齢も八七歳の高齢となり、今まさに静かに終焉の幕が降りようとしている。コロナ禍が、その静かさに拍車をかけている。

コロナ過で療養所訪問が出来なくても、私も好善社の「寄り添う」想いは変わらない。今は電話や手紙で交流を繋いでいるが、訪問の許可が出ればすぐにもお訪ねしたいと願っている。

瀬戸内の夕陽は美しい。が、どの療養所にも同じ光が射して、そこに夕映えの風景がある。その光に照らされて、入所者の皆さんが「つつがなく生きて今日すてきな一日」を過ごされるようにと、ひたすらに願ってやまない。

理事 川崎正明

療養所教会の今 ⑥ 長島曙教会

好善社代表理事 三吉信彦

四月二四日（日）、長島曙教会の主日礼拝に出席しました。曙教会訪問は五年ぶり、また礼拝出席は実に一九九六年以来です。ただ、曙教会については、毎月末好善社に送られてくる週報によつて教会の現状を知り得て、いつも親しみを覚えていました。四月に入つて新型コロナウイルスの蔓延防止策も軽減されつつあり、この際ぜひ長島を訪ねてみようと思ひ立ったのでした。



礼拝に参加して

朝九時一五分から礼拝が始まり、大嶋得雄牧師の司式で、いつもと変わらぬ順序で礼拝が進んでいることに、懐かしさがこみあげてきました。聖書の箇所はルカによる福音書二四章のエマオのイエスの記事で、説教題は「一緒に歩いて行かれた」。信仰が揺らぐような私たちに、よみがえりの主が共に歩いて下さると、慰めに満ちた説教を頂きました。出席者は私を含めて八名、三名の教会員、他に介護者一名、園外の関係者二名、そして大嶋先生でした。

長島曙教会の今

一九三一年創立の曙教会は九一年の歴史を刻む中で、最盛期は四六〇名の会員を擁し、一九九六年ころには礼拝出席五〇名であったと伺いました。現在教会員は一九名、礼拝出席は一〇名ほどです。出席された三名の方々は、高齢となりお身体が不自由です。でも、移動の介護を受ける身になつても「主日礼拝だけは必ず！」との気迫を感じ、長く教会を守つてこられた信仰の姿勢に深く心を打たれました。

牧会三八年の大嶋牧師退任

礼拝後、大嶋先生と歓談の時をもちました。実は、三月末の週報に「五月末をもって大嶋得雄牧師は退任されます」と記されてあるのを読んで、「これはご挨拶に伺わねば！」と考えたのも、今回の訪問の動機のひとつであり

ました。大嶋先生とは、私が奈良・高の原教会時代に、大島青松園霊交会のクリスマス礼拝で毎年お会いしてお交わりを頂いた仲です。



大嶋得雄牧師

大嶋先生は曙教会に赴任されて三八年、八一歳になられます。牧会の傍ら、「聖書のらいに取り組んで」（3巻）を執筆、ハンセン病の差別問題に熱心に取り組んでこられました。共同牧会者であられた美枝子夫人が最近ご病気になるれ、夫人の介護に当たるため退任を決断されたと伺いました。

牧会をつなぐ四人の牧師

「ハンセン病療養所にある単立の曙教会に、小倉兼治、原田政人、大嶋得雄の三人の牧師が与えられたことは、主なる神の特別な恵みと御計らい」と沿革史に記されていましたが、今後は大嶋牧師のご子息である大嶋良兵牧師が引き継がれます。大嶋先生ご一家の平安をお祈りしています。

好善社と曙教会との関わりは、一九四九年の会堂建設、また原田季夫先生の聖書学舎の開設、全国学生社会人ワークキャンプなど、お交わりが深いことを改めて確認、感謝した次第です。

人間回復の瞬間^{とき}

上野正子

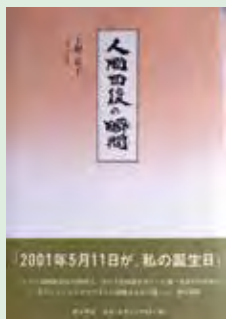
「神様、今日は大事な判決の日です。この裁判が敗訴になれば、園内の皆様に大変な迷惑を掛けたことになりますので、どこかで自殺を覚悟しています。クリスチャンは自殺は大罪だとは教えられてはいますが、今回の私たちの責任は大変重いのですから、この道しかありません。この大罪を許して下さい（中略）」というお祈りを捧げました。それから取り急ぎ、私が信頼する友人に「これから熊本に向かって出発しますが、もしも厳しい敗訴となれば、帰園することはできないでしょう。どうぞ、後のことをよろしく願います」と書き残し、通帳、印鑑と共に机の上に置きました。

午前十時。裁判長から勝訴判決が下されました。「一九六〇年以降、隔離の必要性が失われ、らい予防法の隔離規定の違憲性は明白」と国の責任がはっきりと認められたのです。報道陣に囲まれて「今の気持ちはどんなですか」と聞かれ、「正義は必ず勝つ。私はこれから親がつけてくれた本名の正子になります」ときっぱり宣言しました。六十年もの間、偽名の陶山八重子で過ごしてきましたが、たった今その偽名をすっかり脱ぎ捨てて、上野正子になったのです。新しい私の誕生です。まさに人間回復の瞬間でした。

（上野正子著『人間回復の瞬間』19〜25頁から）



サーターアンダギーをつくる上野正子さん。
(2021年5月 NHKニュースより)



上野正子（つえの・まさこ）

1927（昭和2）年、沖縄県八重山諸島の石垣市に生まれる。1940年、13歳で沖縄県立第二高等女学校入学。その頃ハンセン病を発症、鹿児島県鹿屋市にある国立ハンセン病療養所「星塚敬愛園」に入所、園名を八重子と名乗る。現在まで長い入所生活を続けている。1946年、園内で元警察官だった上野清と結婚。1950年、園内のキリスト教恵生教会で受洗、クリスチャンとなる。1996年4月「らい予防法」が廃止。1998年7月、ハンセン病国家賠償訴訟の第一次原告となり、熊本地裁の証言台に立った。園内の猛烈な反対の中で闘いが続いたが、3年後に同志と弁護士、支援者と共に、原告勝訴と国の控訴断念を勝ち取った。裁判後は、ハンセン病問題の語り部として全国各地での講演が続いている。また、現在も自治会の役割を担っている。2009年、自身の証しと裁判記録を取録した『人間回復の瞬間』（南方新社）を出版した。

本名の上野正子に戻った「人間回復の瞬間」の証言に圧倒される。「恥でもないことを恥だと思ふことが、本当の恥である」という林力さんの言葉に励まされた。一方でユーモアがあり、訪問者に沖縄名物「サーターアンダギー」を揚げてもてなす。映画「あん」の主人公のモデルとしてメディアに知られ注目された。2007年、60年を共にした夫を天に送った。闘志と祈りの人―95歳の人間・上野正子は、老いて益々お元気である。

ハンセン病回復者に寄り添って

好善社145年の歩みを顧みる

好善社社員 長尾文雄

好善社は、1877（明治10）年に、女子学院の前身であるB6番女学校の創立者、アメリカから教育宣教師として来日したケイト・M・ヤングマン女史の呼びかけに応えた10名の女子学生によってスタートしました。「キリストの精神を如何に社会的に実践するか」という理念に基づくボランティア活動として、子どもたちの教育と宣教活動などを実践し、そのグループの名前を「好善社」としました。

■ハンセン病患者との出会い

その後、ヤングマン宣教師はハンセン病を病む一人の女性と出会います。この人は、御殿場にあるカトリックの神山復生病院に入院していた人でした。この女性との出会いをきっかけに、プロテスタントの信仰に基づいた療養所、病院をつくる運動を展開し、その過程で「英国救らい協会」の資金協力を得て1894（明治27）年に東京目黒村に土地を求めて、私立ハンセン病院を設立することになったのです。また、その機会に好善社の組織を改革し、男性社員を含めた「社団法人好善社」を立ち上げました。

■私立病院「慰廃園」の運営

その後、「慰廃園」と称したこの病院は48年間、ハンセン病患者への伝道と医療に携わりました。この慰廃園は、「キリストの精神を社会的に実践する」という創業の精神に基づき、ハンセン病を患った人々に精神的な安らぎを与える場所としての役割を果たしました。1941（昭和16）年、太平洋戦争が勃発、アメリカからの援助が途切れ、ついに1942年に慰廃園は、収容されていた人たちを国立療養所多磨全生園に移管して閉園することになりました。48年間の収容患者数は、4千159人でした。

■全国の療養所との出会い

戦争が終わると、空襲を受けた慰廃園の跡地に焼け残った、当時の好善社理事長藤原鉤次郎の家を全国のハンセン病療養所の東京出張所として、宿舎に提供したのです。また、戦後すぐに全国の療養所に対して、アメリカ救らい協会から送られてきた救援物資の配布などの活動をします。その後、療養所内へのキリスト教の教会堂建設、またハンセン病の患者たちの中からの伝

道者養成を目的とした「長島聖書学舎」を立ち上げて財政面の協力をします。10年間で20名の卒業生を送り出し、その中で4名の方が日本基督教団の牧師の資格を得て、療養所教会の牧師として活動をされたのです。その他の方々は、信徒伝道者として奉仕をされました。

■療養所でのワークキャンプ

それと並行して、1960年に関西学院大学の学生が邑久光明園でワークキャンプを行います。好善社がそのワークキャンプの実績を参考にし、1963年に長島愛生園で「第1回全国学生社会人ワークキャンプ」を実施、入所者との交流を深める場を設けました。その後、毎年1、2カ所の療養所



1984年8月 東北新生園でのワークキャンプ

で開催し、1998年栗生楽泉園での60回で終了しました。その間のキャンプ参加者は、延べ1千人となります。またこの間、療養所教会で「教会生活研修会」を5回実施しました。

■好善社社員の世代交代

慰養園の閉園後の社員たちは高齢となり、1958年29歳の若い藤原偉作が亡父藤原鉤次郎の後任として理事長に就任。その藤原理事長のもとに、ワークキャンプで育った学生や社会人たちが社員となり、戦後の新しい好善社に生まれ変わっていきます。ワークキャンプは好善社の世代交代のターニングポイントとなったのです。その間に、療養所の中の教会代表者会議を行いました。また、本土復帰に先立ち沖縄の療養所教会代表者を本土に招いて全国の療養所訪問の手助けもしました。



2019年8月 第15回タイ国青少年ワークキャンプ

■台湾とタイ国のハンセン病支援

1977年、好善社が創立100周年を迎えた時、これまで外国からの支援を受けて活動してきたので、これからはアジアの発展途上国のハンセン病支援に向かおうと、1980年代に台湾に若い社員の小林健志と木村直樹の二人を、また看護師の友澤定子社員を派遣して医療伝道に従事しました。

そして、藤原偉作理事長が、1982年にタイ国の女性のハンセン病専門医カンチャナ・コンスープチャートさんと出会い、タイのハンセン病療養所への関わりを始めます。そして、姉妹団体チャンタミット社の設立に協力し、今日まで経済的な援助を続けています。

また、人的支援としてタイ国保健省を通じてタイ国の医療現場に阿部春代社員（看護師）を派遣し、2019年まで29年間の活動をしました。また、コロナ（回復者村）の保育園のために木村幸子社員（管理栄養士）を1992年から6年間派遣しました。

1992年には、相互交流を図るために、好善社社員とチャンタミット社社員による療養所内でのワークキャンプを4回実施し、それが「タイ国青少年ワークキャンプ」に発展、2019年までに16回を数えています。

■「公益社団法人」に移行

藤原偉作理事長は1998年に亡くなりますが、好善社は棟居勇理事（牧師）を理事長に立て、遅滞なく事業は継続しました。2014年に好善社は「公益社団法人」に移行し、それまで

の理事長棟居勇が代表理事に就任。その後、2016年に三吉信彦理事（牧師）が代表理事となり、現在の好善社を担っています。

ここまで好善社の145年の歩みを大まかに概観しました。1894（明治27）年以内の国内のハンセン病にかかわる活動の記憶をたどりました。現在は、社員による全国療養所訪問、ハンセン病啓発講演会、広報誌「ある群像」の出版等が続いています。また、タイ国のコンケン県立シリントン病院で看護師として医療協力活動が続いていた阿部春代社員は、29年間の勤務を終了。その後もタイに留まってチャンタミット社の活動やコロナの高齢者を支援しています。

■今後の好善社の活動の行方は

しかし今回、コロナ禍により私たちは療養所訪問ができなくなり、電話や手紙での交流をつづけていますが、療養所の入所者は950人余となり、平均年齢も87歳です。あと10年もすると、入所者はゼロになるといふ終焉の足音がそこに聞こえてきます。

これから後、好善社はどのように活動するかを考えます。「キリストの精神を社会的に実践する」という好善社の活動の原点に立ち返り、若い社員と一緒に知恵を絞り、ハンセン病回復者に寄り添っていきたく願っています。

（本稿は、邑久光明園機関誌「楓」602、603号に掲載したものを短縮・加筆したものです）

好善社新社員紹介

「知ること」 から始めたい

工藤 尚子



昨年より社員に加えていただきました。同志社香里中学校高等学校（大阪府寝屋川市）で、聖書科の教員として働く日本キリスト教団の教務教師です。

私の母校は、現在の勤務先の系列校である同志社女子中学校高等学校（京都市）です。母校では毎年母の日礼拝の際に、カーネーションのブローチを販売していました。その収益は「好善社」への献金となると説明を受けたのが、私と好善社との出会いでした。好善社の方、療養所の入所者の方がお話しに来てくださることもありました。

中2の聖書の授業では、母校の卒業生にも当たる「井深八重」について紹介されました。自分がその立場だったらと、ずしりと重く受け止めたのを覚えています。中3の時に勧められて遠藤周作著『わたしが・棄てた・女』を読んだことで、その思いは一層深まりました。

当時使用していた新共同訳聖書の中の「らい病」の表記について、「重い皮膚病」と読み替えるよう、経緯を含めて聖書の授業で教わったのもその頃でした。また、同じく聖書の授業で、「らい予防法廃止」のニュースについても聞きました。こうして振り返ってみる

れます。母校と同じ系列に属するキリスト教主義学校で、まさに聖書科という教科を担当する立場となり、今度は私が生徒に伝えていく役目を負っているのだと感じています。

昨年、キム・ジへ著『差別はたいがい悪意のない人がする』（大月書店）という本を読みました。真実を穿った鋭いタイトルです。明確な悪意や自覚を持って差別が行われることは案外少なく、「これは差別ではなく区別」「そ

と、ハンセン病に対する私の知識や眼差しは、中高時代に母校で培われたものだと気付かされ、うしななければ、社会が成り立たなくなるといった「正しさ」を装う言説に覆われつつ差別は進行します。無関心や表面上の浅はかな納得が、それらを後押しします。

好善社と出会っていなければ、私もまた「まあ当時は仕方なかったのかもね」とうそぶく「悪意のない差別者」であり続けたかもしれませぬ。まず、私自身が「知る、学ぶ」ということを大切にしながら、「知らせる」という役目を担っていければと思います。

（くどう・なおこ）

【編集部註】井深八重は日本最初のハンセン病施設「神山復生病院」（静岡県御殿場市）に勤めた看護師。ナイチンゲール賞を受賞。

ウクライナ情勢について緊急声明

公益社団法人 好善社
代表理事 三吉信彦
社員一同

私たちは、ロシア大統領プーチン氏にウクライナへの軍事侵攻を即時停止することを求めます。正義を掲げる戦争などはありえず、戦争は殺人行為であり、犠牲者は一般市民、特に最も弱い立場の人々であります。

私たち好善社は、ハンセン病問題にかかわる活動をする団体ですが、その活動の原点は生命の尊厳です。戦争は、生命の尊厳を踏みにじる最悪の行為です。特に今回、プーチン氏は核使用に踏み込むことを示唆し、ウクライナ国民に脅しをかけており、また核の使用は広島・長崎の惨状の再現となり、唯一の核被爆国の日本国民として、決して容認することはできません。

私たちは、全世界がウクライナ国民に連帯し、またロシア国民が立ち上がり、プーチン氏にウクライナへの侵略をやめるよう圧力をかけることを願います。

2022年3月8日

◆理事、監事を改選

5月4日、理事会と社員総会を開催、理事・監事改選期に当り、代表理事に三吉信彦、その他の理事7名と監事1名を選任しました。(氏名は8頁参照)

◆「ウクライナ情勢緊急声明」発表

3月8日、JANIC(NPO法人国際協力NGOセンター)を通して、ウクライナへの連帯の声明を行いました。(内容は6頁に掲載)

◆新年度を迎え療養所訪問再開

一昨年以來、コロナ禍の影響で療養所訪問が制限されていましたが、三吉代表理事が特別許可を得て、三療養所の園長を表敬訪問しました。

- 4/14 駿河療養所・北島信一所長
- 4/25 長島愛生園・山本典良園長
- 4/25 邑久光明園・青木美憲園長

◆「ハンセン病を正しく理解する講演会」開催予定

・関東講演会 6月25日(土)
 於・日本キリスト教団千葉教会
 ・関西講演会 7月2日(土)
 於・日本キリスト教団西宮中央教会

◆「慰廃園記念碑」建立関係事業

次の事業を今秋に予定しています。

- ①記念碑建立感謝会
- ②特別講演会開催
- ③記念冊子(ブックレット)発行

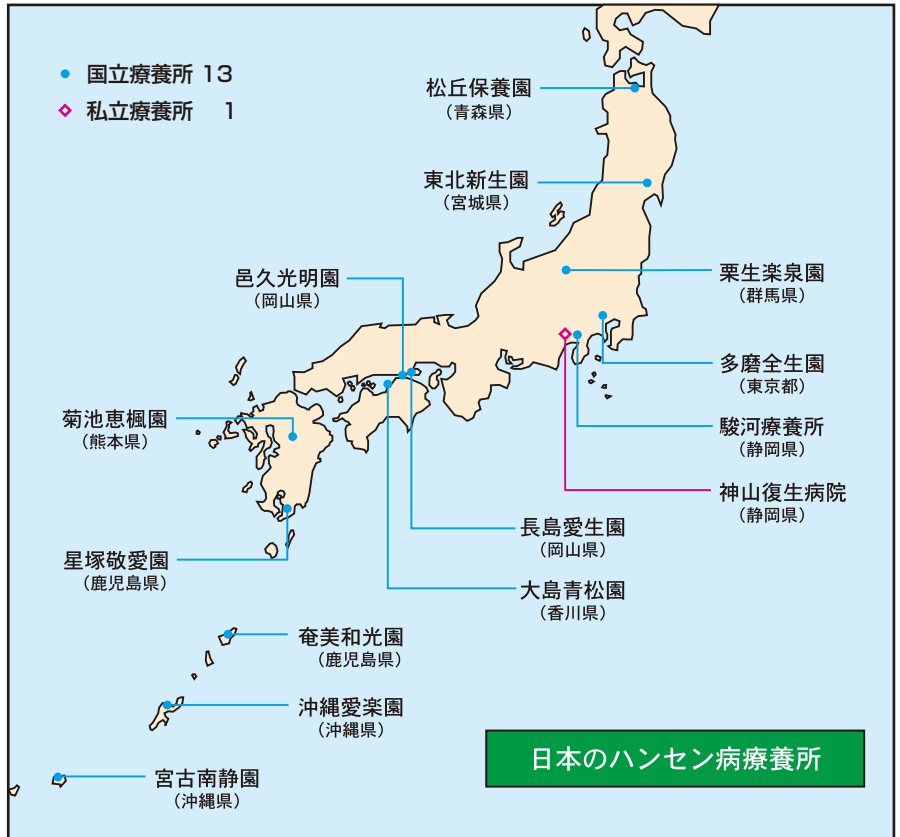
好善社
ホームページ
閲覧の
QRコード



国立療養所 入所者数
2021年12月末現在

	男	女	計
松丘保養園	22	35	57
東北新生園	13	29	42
栗生楽泉園	24	26	50
*多磨全生園	56	70	126
駿河療養所	24	23	47
長島愛生園	63	55	118
邑久光明園	29	37	66
菊池恵楓園	63	95	158
星塚敬愛園	34	48	82
奄美和光園	5	13	18
沖縄愛楽園	54	56	110
宮古南静園	23	22	45
21年12月計	433	527	960
20年12月計	460	569	1029
前回比	-27	-42	-69

*は2021/5/1現在の数字



6月・夏期募金のお願い

国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2022年度募金（会費・寄付）目標額 1,000万円

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2021年12月末日現在の入所者数960人、平均年齢87.2歳となりました。急速な高齢化の終焉期を迎えています。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止、「国家賠償請求訴訟」原告勝訴、「ハンセン病問題基本法」成立、そして2019年「ハンセン病家族訴訟」原告勝訴による「ハンセン病家族補償法」が成立しました。しかしなお、社会に残る偏見・差別の解消には至っていません。好善社は次のような活動を行っています。

国内ハンセン病啓発・支援事業

- ◆全国13ヵ所の療養所訪問・交流活動を続ける。
- ◆偏見差別解消のための講演会・出版・啓発活動。
- ◆回復者・入所者のいのちの尊厳が保障され、その人たちの名誉回復、ハンセン病問題の最終的な解決の実現を願っての支援と啓発活動を続ける。

2022年度収支予算(抜粋・単位円)

療養所訪問・広報宣伝費	4,780,000
タイ国支援事業・チャンタミット社支援	1,500,000
・専門家派遣(看護師)	2,200,000
・現地調査・交流費	2,000,000
事業管理費	7,140,000
収入 会費	3,700,000
寄付	6,500,000
雑収入	5,000

タイ国ハンセン病支援事業

今年度570万円の活動費が必要です

タイ国の姉妹団体チャンタミット社を支援しています



元長老と家族の再会の様子

この団体への協力が、阿部社員の主な活動で、その一つは高齢者支援です。昨年末、タイ北部の教会の元長老(94)が所在不明となり、家族が警察に届け出ました。3月にチャンタミット社が隣県の人間の安全保障課から問い合わせを受けて立ち合い、4月下旬によく再会ができませんでした。

好善社は1982年からタイ国のハンセン病に関わり、阿部春代社員(看護師)を東北部の病院へ派遣し、29年間の働きを終えました。しかし、好善社のタイ国での事業支援は継続しています。特に、1987年以来好善社は、タイ国のハンセン病支援団体チャンタミット社の運営への側面的支援を継続しています。回復者の子どもたちへの奨学金活動にも関わり、2005年からこの奨学生を対象としたワークキャンプが始まり15回に達しました。過去2年はコロナ禍でやむなく中止。今年は青年リーダーたちが、5月にワークキャンプ準備会を実施します。

公益社団法人 好善社

2022年5月25日

代表理事/三吉信彦

理事/棟居 勇 川崎正明 阿部春代 乗 圭子 藤原真実

岡田祐之 渡辺圭一郎 監事/加藤裕司